



# 全国の果樹苗木生産のシェア8割を誇る 伝統の苗木作りの技術を守る

果樹苗木経営 田主丸町 田籠 隆嘉さん(29歳)

## 植木・苗木発祥の地

田主丸町での植木・苗木の栽培は、江戸時代中期に始まり、櫨苗や桑苗生産が盛んに行われ、明治中期には、現在の田主丸町植木地区の住民のほとんどが苗木生産者というほどの産業に成長しました。現在は、全国で生産されるかんきつ苗木の約8割を生産し、全国のかんきつ果樹生産を支えています。

## 苗木作りの職人

苗木の生産は、まず、台木の種子を撒いて1年間育てます。そして、台木に穂木を接木し、腰ほどの高さになるまで育成します。この時、台木や穂木の種類によって接ぎ方は様々、穂木の切り方や接ぎ方の技術の差で、芽の出る確率が異なります。また、芽が出てからも、芽かきの技術や手間のかけ方で苗木の枝の大きさが変わってくるため、手を抜くことは出来ません。

隆嘉さんはお母さんと二人で、50アールにかんきつ苗木を始めとする苗木を50種類、約4万本栽培しています。多いときは、1日1、200本の接木をするため、腰に負担がかかる仕事ですが、「どんな仕事でも大変なことは同じ。慣れれば、きついと感じない。」と言います。また、隆嘉さんは24歳で就職し、現在就農5年になりますが、「今でも、芽が出るまではドキドキする。苗木作りは職人的な技術が必要なので、自分ももつと技術を磨きたい。」と語ってくれました。

## 苗木作りを守る

最盛期に比べると果樹苗木の需要は減っていますが、「全国の果樹農家を支えていることは誇り、需要に合わせた品種栽培や細かい気配りの経営とともに、田主丸町の苗木作りの技術を守っていききたい。」と強い眼差しで話してくれました。

